モンゴル・インパクトの一環としての「モンゴル襲来」

四日市康博　（昭和女子大学・非常勤講師）

はじめに

13 世紀から 14 世紀にかけてモンゴル帝国およびその継承政権の支配は東西ユーラシアの各地に拡大し、その影響は様々な地域や社会に及んだ。そのため、ユーラシアの東西では言語・宗教・民族など文化的な枠組みを超越してモンゴル的な共通様式が見られる[1]。そのような経済的・文化的交流の背景として、モンゴルの覇権に伴う東西交通の安定を意味する「モンゴルの平和」Pax Mongolica があったと言われている[2]。ただし、この概念はあくまでも一面的な見方に過ぎず、それだけで経済的・文化的交流の全てを説明できるわけではなく、ましてや、モンゴル覇権下のユーラシアで戦争のない平和な状態が享受されたことを意味するわけではない。モンゴルとユーラシア各地の文化圏や社会とは、時には衝突し、相克し、共存し、融合しつつ、多角的かつ重層的に両者の交流がおこなわれた。すなわち、ユーラシア各地において、いわゆる「モンゴルの衝撃」Mongol Impact があり、そして、それに対する各地域・各社会のレスポンスが存在したことを認識しなければ、交流の内容もその後の影響も理解することはできない。この場合の「モンゴルの衝撃」には、短期の政治的・軍事的なインパクトだけでなく、長期的な経済的・文化的なインパクトも含まれる。つまり、「モンゴルの平和」と「モンゴルの衝撃」は同時に存在する表裏一体的な概念であり、ユーラシア全体における「モンゴルの平和」を理解するためには、ユーラシア各地における「モンゴルの衝撃」とそれに対する各地域・社会におけるレスポンスを知る必要があるだろう[3]。

１．モンゴル帝国=元朝の海域アジア経略と日本侵攻

日本への「モンゴル襲来」を扱うには、モンゴル帝国=元朝の海域アジア全体に対する経略方針についても見ておかなければならない。モンゴル帝国の侵攻は金朝、高麗、南宋、日本、ビルマ、チャンパー、ベトナム、ジャワなど多角的におこなわれたが、決して

---

[1] モンゴル帝国期は、ユーラシアの東西において、モンゴル語、トルコ語、ペルシア語、チベット語、漢語など発令された文書の言語の如何にかかわらず、類似した文章構造や共通の特定語彙が使用された文書が見られる。このようなモンゴル帝国期に共通する様式を持つ文書は「モンゴル帝国様式文書」或いは「モンゴル命令文書」などと呼ばれる。詳細は、四日市 2015 および Yokkaichi 2015 を参照。

[2] 「モンゴルの平和」Pax Monglolica は「タタールの平和」Pax Tatarica とも呼ばれ、早くは Michael Prawdin などがその概念を提唱している（Prawdin 1937; 佐口透 1970; 四日市 2001 などを参照）。ただし、Prawdin や佐口など初期の「タタールの平和」論に見られるような政治的・軍事的な安定が全ユーラシア規模で実現していたとは考えられない。「モンゴルの平和」とは、あくまでも経済面・文化面に寄与した東西交通の安定化のみを指す限定的な分析概念である。したがって、ユーラシアにおけるモンゴル帝国の覇権を「モンゴルの平和」という概念だけで表すのは極めて一面的であり、各地の社会・文化に動揺を与えた「モンゴルの衝撃」Mongol Impact も同時に論じなければ、片手落ちである。

[3] この問題に関して、2016 年 12 月に国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト：考古学・歴史学から見た「海域アジアのモンゴル襲来」」(International Symposium “Mongol Impact on Eurasia: Archeological and Historical Perspectives of the Mongol Invasion”)が昭和女子大学において開催され、日本、中国、韓国、ベトナム、モンゴル、オーストラリア、イスラエルから考古学者・歴史学者・地域研究学者が報告をおこない、活発な議論がおこなわれた（オーガナイザー：菊池誠一・四日市康博ほか）。このシンポジウムの成果は単行本として 2017 年度に刊行される予定である。

それぞれが別個におこなわれたわけではなく、全てが連動していた。日本に焦点を当ててみると、日本への「モンゴル襲来」は元朝と日本の二国間外交だけによる結果ではなく、高麗を介した三カ国間の国際関係が反映された結果であり、さらには高麗における独立勢力であった三別抄もモンゴル、日本双方に対して外交的な動きを見せていたことが知られている[4]。

周知のように、日本侵攻の切っ掛けとなった建言は高麗人の廷臣である趙彝によるものであったが[5]、趙彝が建言をおこなった至元二年(1265CE)というタイミングは、モンゴルの度重なる侵攻に対して中統元年(1260)に高麗がモンゴルの冊封を受け容れ[6]、また南方では中統三年(1262)に陳朝ベトナムが三年一貢の約（朝貢）を受け容れて安南国王に封じられ[7]、本格的な南宋侵攻を前にして、いかにその隣国の日本を処遇するのか様子を伺っているという局面であった。モンゴルでは伝統的に戦争の最前線で帰順した敵兵は次の戦闘の前線に送られることになっている[8]。この習慣に従えば、新たに服属した高麗の兵も次なる戦場へ送られるはずであった。ところが、この直後、至元五年(1268)の襄陽攻略戦を皮切りに本格的な南宋攻撃が開始されたものの、高麗軍が対南宋攻略戦に動員されたという記録はほぼ見られない。彼らが動員されたのは、珍島・耽羅（済州島）に立てこもった三別抄軍の平定、さらにはその海の向こうに位置する日本攻略であった[9]。日本に侵攻してきた軍の主体は、第一次侵攻（文永の役）時も第二次侵攻（弘安の役）時の東路軍（高麗発艦隊）もモンゴル帝国による一連の高麗経略の末期に送り込まれ、三別抄を平定したヒンドゥの軍および高麗から帰属した洪福源・洪茶丘の軍であった。つまり、モンゴルによる日本侵攻は明らかに高麗経略の延長線上のものとしてあったのである。

一方、モンゴルの日本侵攻は高麗以外の国々に対するモンゴルの経略とも互いに並行・連動していた。このとき、東南アジア方面では、陳朝ベトナムとの関係が表面上は安定化していたものの[10]、ビルマに派遣した使節に対するパガン朝の対応は反発的なものであり、摩擦が増大しつつあった。実際、至元十一年(1273)に第二次ビルマ派遣使節がパガン朝によって処刑されたことを受けて、第一次日本侵攻（文永の役）の三年後、至元十四年(1276)に元朝は第一次ビルマ侵攻を開始する[11]。この時、元朝は東方における日本攻略、南宋攻略、さらに南方ではパガン攻略という３つの経略を同時進行していたのである。第一次日本侵攻、第一次ビルマ侵攻が失敗に終わると、引き続き、第二次侵攻の準備にとりかかるが、南宋の都、臨安を無血開城させ、さらに至元十五年(1279)の崖山の戦い

---

[4] 三別抄と日本の交渉に関しては、村井章介 1988(a)および石井正敏 2010 を参照。また、モンゴル侵攻以前の南宋、高麗、ベトナム、日本の外交については榎本渉 2015 を参照。

[5] 『元史』巻二〇八，外夷伝一，日本

[6] 『元史』巻二〇八，外夷伝一，高麗

[7] 『元史』巻二〇九，外夷伝二，安南

[8] これと同じ習慣はチンギス=ハンやオゴデイ=ハーンが中央アジアからイランにかけて遠征をおこない、領土を拡大した際にも見られる。その記録が残される『世界征服者の歴史』にはモンゴル語でこの習慣を表した語は見られないが、ペルシア語では「ハジャル」hajar と呼ばれている。

[9] 至元五年(1268)には高麗国王が元宮廷に対して兵一万と船千隻を準備したと上奏してきたため、世祖フビライは都統領ドルヂを派遣してこれを閲見させると共に黒山から日本に至るルートを視察させており、高麗の船兵が日本経略への転用を前提とされていたことがわかる。（『元史』巻六，世祖紀三，至元五年七月丙子）

[10] 実際には、ベトナムにおいてもモンゴルによる監督官ダルガチの派遣と厳格な要求に対する反発が増大しつつあり、モンゴルに対する反感は陳朝の太宗の死後、モンゴルとの戦争へと発展することになる。

[11] 『元史』巻二一〇，外夷傳三，緬。

を以て完全に南宋が平定されるのを待って、至元十七年(1281)に第二次日本遠征がおこなわれた。時を同じくして、東南アジア方面でもビルマ侵攻の動きが再び活発なものとなり[12]、至元十九年(1283)から南海交易の拠点であるチャンパーへの侵攻を開始[13]、至元二十年(1284)にはビルマへの侵攻が本格化した[14]。いずれも、南宋攻略軍が日本、チャンパー、ビルマへと振り分けられた結果であろう[15]。このように見てみると、日本侵攻が高麗経略の延長線上にあるばかりでなく、一方では、南宋攻略とも連動しており、その南宋攻略は東南アジア方面のチャンパー、ベトナム、パガンの攻略とも直接連動していた。つまり、日本侵攻は海域アジア全体におけるモンゴル帝国=元朝の経略の一環として捉えられなければならないのである。

２．海域アジア諸国への「モンゴルの衝撃」

前節で見たように、モンゴルの軍事的侵攻は東部海域アジア諸国のほぼ全域に及んだのであるが、もちろん、「モンゴルの衝撃」はそのような軍事的インパクトだけに限られない。中長期にわたって経済的・文化的なインパクトをも各地域に与えたと考えられるのである。モンゴル側から各地域への「インパクト」には当然ながらある程度の共通性が見られるが、その「インパクト」に対する地域ごとの「レスポンス」、すなわち、政権や社会の反応やインパクトの影響による社会変容はそれぞれのケースによって異なっていたはずである。

高麗の場合はモンゴルと断続的に交戦と和解を繰り返し、最終的にモンゴル=元朝側が態度を軟化させたことから、全面的に降伏して冊封を受け容れた。高麗は形式的にはモンゴル帝国の所領（＝属国）という扱いではあったが、実質的には高麗王家による独立支配を維持していた。これとよく似た国際関係としてウイグル王国、オングト王国など中央ユーラシアにあってモンゴル帝国に帰順した諸王政権が挙げられる。当然ながら、これらの国々はモンゴル帝国=元朝の統治政策・財政政策などの影響・干渉を直接受けることになり、それだけモンゴルからのインパクトも強く、政治・経済・文化など多方面にわたっていたと言える。これに対して、高麗王家は融和という方法で対処した。すなわち、歴代の高麗王は公主（元朝皇帝の娘）を娶って駙馬（クルゲン）（娘婿）となり、その王子は禿魯花（トルカク）（質子）として元朝皇帝のケシク（輪番近衛兼エリート育成機関）に出仕することで、モンゴル帝国の皇族に準ずる存在として優遇を受けることになった。高麗王家はそれら諸王家の中でもとりわけ高い地位を保証されている[16]。また、高麗の官制は元朝的な官制に準じるように改められ、高麗宮廷の王族・貴族の間ではモンゴル文化の受容も進んだ。従来はこのようなモンゴル帝国との融和を否定的に捉える傾向が強かったが、近年はむしろ肯定的

---

[12] 『元史』巻一一,世祖紀八,至元十七年二月丁丑

[13]『元史』巻二一〇, 外夷傳三, 占城。

[14] 『元史』巻二一〇, 外夷傳三, 緬。

[15] さらには、重罪人およびモンゴル兵、さらには、南宋から新たに帰順した「新附軍」がそれぞれ日本、チャンパー、ビルマへの遠征軍に振り分けられて用いられた。（『元史』巻一二,世祖紀九,至元十九年十一月甲戌；巻一二,世祖紀九,至元二十年五月戊午）

[16] モンゴル帝国=元朝内における高麗王家の位置付けおよび高麗王政における反映に関しては、森平雅彦 2013（特に「駙馬高麗国王の誕生」(22-59 頁);「高麗王位下とその権益」(60-104 頁);「高麗王家とモンゴル皇族の痛恨関係に関する覚書」(105-146 頁);「元朝ケシク制度と高麗王家」(147-203 頁)）を参照。

に認識する研究者も現れている[17]。高麗王家は積極的にモンゴル帝国の上層部の一部となることによって「モンゴルの平和」Pax Mongilica による政治的安定や異文化受容を享受できたとも見ることができるのである。例えば、森平雅彦によれば、高麗期の王権の崇仏的要素が、続く朝鮮期には排されて、代わりに朱子学が体制教学としての役割を強めたが、この朱子学が本格的に伝播したのが元朝期であった。また一方で、元朝との関係を通じて、高麗仏教は中国仏教・チベット仏教・インド仏教との交流を深め、国家的宗教・民衆的宗教の両面において変容をきたしたとされる[18]。

一方、高麗と対照的なのがベトナムである。陳朝ベトナムの場合は、やはりモンゴルの攻撃を受けて冊封を受け入れたが、モンゴル側の全ての要求を受け容れたわけではなく、内政干渉が強まると反発が強まり、戦争に発展した。これにより、都のタンロンを陥落させられたが、結果としてモンゴル軍を撃退することに成功した。その後、陳朝は即座に朝貢をおこなって捕虜を返還し、冊封を再び受け入れている[19]。これによって陳朝は実質的な独立性を勝ち得たと考えられている。朝貢に伴う経済的な紐帯は維持したものの、モンゴルからの政治的干渉の排除に成功したのである。戦争に勝った上で敢えて形式的に服属することで二国間の関係を政治的な関係から経済的な関係に変換し、以後、「モンゴルの衝撃」は主に経済面・文化面に限定された[20]。このことに関しては、ベトナムの政治的独立を守ったとか、ナショナリズム発揚の発端となったという評価が存在する一方で、「モンゴルの平和」および「モンゴルの衝撃」に伴うユーラシア=インド洋海域世界規模の経済的・文化的交流の享受も限定的なものにとどまったという見方も存在する。

３つめのパターンとしてジャワのシンガサリ朝／マジャパイト朝が挙げられる。ジャワは日本と同じく招撫を受けた当初は元朝の冊封体制へ入ることを拒んだが、元朝の侵攻を受けて撃退した後に元朝に朝貢使節を派遣した。この時、マジャパイト王が元朝から王公に封じられたという記録は残っていないので、冊封を受けてはいないと考えられるが、以後、盛んに朝貢をおこない、元朝とジャワは戦役以前よりも緊密な通商関係を持つようになった[21]。「元朝・ジャワ戦役」が契機となって、以後の長期的な「モンゴルの衝撃」＝朝貢に伴う通商関係の樹立が生じたのである。なお、この通商関係の樹立はジャワ側の行動によって生じたわけではなく、元朝側もジャワ戦役に際して招撫使と商人の一団をジャワの周辺諸国に派遣していたことが知られている。

最後に、スマトラ島のサムドラ王国や南インドのマァバル（＝パーンディヤ王国）との関係を挙げておきたい。いずれの国も直接にはモンゴル帝国=元朝の侵攻を受けてはいないし、冊封も受けていない。とはいえ、これらの国々にも遠征軍を派遣しようという動きが無かったわけではない。元朝宮廷ではタイ、スマトラ島から南インドにかけての国々に派兵をおこなう案も討議されたが、結局は使節を派遣して招諭することに落ち着いた。実際、至元十七年には、クーラム、マァバル、ジャワ、ベトナムが朝貢してきており、ま

---

17 森平雅彦 2013（特に「高麗・元関係史研究の意義と課題」(1-21 頁)）；李康漢 2016 などを参照。
18 森平雅彦 2013, 5 頁, 291-309 頁.
19 元朝のベトナム経略の経緯に関しては、山本達郎 1950; 同 1975; 四日市康博 2015(b)を参照。
20 陳朝ベトナムおよびチャンパーと元朝の通商・経済関係に関しては、桃木至朗 2011 および四日市康博 2015(b)を参照。
21『元史』巻一八, 成宗紀一, 元貞元年九月丁亥; 巻一九, 成宗紀二, 大徳元年十月乙卯

た、至元二十三年には、マァバル、ラムリー、サムドラを含む十ヶ国が朝貢をおこなっている。中でも、インド東南岸に位置するマァバル（＝パーンディヤ王国）は至元十六年から延祐元年までの間に、記録に見えるだけでも十数回にわたって朝貢をおこなっており、また、元朝側も度々使節をマァバルに派遣している。同様に、13 世紀後半にスマトラ島北部に興った新興イスラーム政権のサムドラ王国もマァバルほど頻度が多くはないものの、至元十九年以後、何度か朝貢をおこなっている。これら、マラッカ海峡以西の諸国の朝貢の特徴として挙げられるのは、(1)政治的目的よりも経済的目的が主目的となって朝貢をおこなっていたこと、(2)単独で朝貢をおこなうのではなく周辺諸国や経由地の使節と同船して往来すること、の二点である。前者に関しては、マラッカ海峡以西の諸国に対して冊封がおこなわれた事例はほとんど見られず、また、世祖フビライ朝末期に朝貢に訪れた使節たちが商人に対する海禁によって帰還できない状況にあったことから、朝貢使節団に多くの海上商人が含まれていたことが知られる[22]。後者に関しては、彼ら南海諸国の朝貢使節が元朝側の招撫によって朝貢に応じたものであったことが反映されている。ただし、これらのケースにおいて元朝側も帝国としての覇権を広く知らしめる目的もあり、また、サムドラをはじめとする海上諸国側もモンゴル帝国=元朝の覇権を自ら統治権力の後ろ盾として利用しようという意図があったと見られる[23]。その意味では、やはりこのケースでも中長期的な「モンゴルの衝撃」が存在し、それが経済的にも政治的にも利用されていたと言うことができる。

３．改めて日本における「モンゴルの衝撃」を考える

さて、以上のような事例が存在することを踏まえて、改めて日本に対する「モンゴルの衝撃」について考えてみたい。日本はモンゴル帝国=元朝からの冊封を拒んで、その摩擦は戦争にまで発展してしまった。同様の事例は、ジャワやパガンなどいくつかの地域でも見られるが、先にも述べたように、日本の場合、戦後も元朝とは正式な国交を持たず、それにもかかわらず民間の交易は活況を呈していた点が特徴的である。

有名な「新安沈没船」は至治三年六月に慶元（現在の寧波）から博多に向かって航行中に風や潮流の関係で韓国沖の新安近海まで流されてそこで沈没した交易船である。この沈船遺跡の船艙からは積み荷がほぼそのまま出土しており、搭載されていた陶磁器、銅銭、紫檀材などは膨大な数量にのぼる[24]。この新安船が慶元を出航した時点で　至元十八年／弘安四年(1281)の第二次日本侵攻（弘安の役）からおよそ四十年経っているわけであるが、この前後四十年ほど、成宗テムルの大徳年間後半から文宗トク=テムルの至正年間初期にかけて――十四世紀前半期には頻繁に日本と元朝の間をジャンク船が往来してい

---

[22]『元史』巻一八, 成宗紀一, 至元三十一年十月乙巳

[23] マルコ=ポーロは小ジャワ（スマトラ島）Java la menor/Giava minore の八王国のうちバスマン王国 roiame de Basma/regno di Basma（パサイ王国）、サムドラ王国 roiame de Samatra/regno di Samara、ダグロイアン王国 roiame de Daroian/regno di Dragoian、ラムリー王国 roiame de Lanbri/regno di Lambri、ファンスール王国（バルス王国）roiam de Fansur/regno di Fanfur が元朝の皇帝を「大ハン」le grant kaan/il gran Can と呼んで臣従しているが、実際には直接の朝貢はおこなっていないことを伝えている。(Marco/F, pp.171-174; Marco/R, pp.260-264.)

[24] 新安沈没船に関しては、문화 공보부 문화재 관리국 1981-85；문화 공보부 문화재 관리국 1988；문화재청, 국립해양유물전시관 2006；川添昭二 1993；村井章介 2013(a)などを参照。

たことが知られている[25]。さすがに元朝-日本戦役の直後には交易船が両国間を往来した記録は残っていないが、戦後およそ十年後の至元二十九年(1292)には日本側が三艘の交易船を仕立て、そのうち一艘だけが慶元に到達できた記録が残っている[26]。また、日本側にも正応三年(1290)に唐船から貿易の利益を差し押さえた記録が残っており、既に通交が再開されていたと見られる[27]。つまり、少なくとも戦後十年で博多・慶元間の交易船の往来が再開され、さらにその十年後には日本と元朝の交易がかなりの活況を呈するようになっているのである。この第二次日本-元朝戦役後の十年間、すなわち、世祖フビライの至元年間後半期は、財政拡大策をはかった権臣アフマドが失脚したものの、続いてウイグル人宰相サンガの推挙を受けた盧世栄が財政改革に着手し、続いてサンガ自身が大量のムスリム・ウイグルを財務官僚に任命して、アフマドと同じく財政拡大策がはかられた時期である。この時期、特にマラッカ海峡以西の南海諸国が大挙して元朝に朝貢をおこない、また、ムスリム商人たちの貿易活動も活発化し、南海貿易は大いに繁栄した[28]。しかし、榎本渉が指摘するように、日本と元朝間の貿易はその時流とは逆の傾向を示している[29]。先にも触れたように、日本と元朝の間でジャンク船が盛んに往来するようになるのは、次代の成宗テムル=ハーン朝後半期からであり、戦役以後、世祖フビライ朝末期までは交易も決して活発ではなかった。その理由は、やはり元朝-日本戦役であった。といっても、二度にわたっておこなわれた第一次・第二次日本侵攻（文永・弘安の役）の影響ではない。第三次の日本侵攻が計画されていたからである。日本の商船が通商を再開した至元二十九年(1292)の時点で、なお日本侵攻計画が持ち上がっている。

至元二十二年(1285)、元朝では第三次日本侵攻をおこなうために征東行省が設置され、その宰相にアタハイ、劉国傑、陳厳、洪茶丘らが任命された[30]。翌年、世祖フビライは日本よりもベトナムへの侵攻を優先する旨の宣言をおこない、また、高麗に隣接する東方三王家領で叛乱が続いたことから、一旦日本侵攻の中止が宣言されるが、東方三王家の叛乱やベトナム、チャンパー、ジャワの戦役が収束した至元二十九年(1292)に、再び日本侵攻の建言がおこなわれ、高麗王忠烈王もそれに賛同したことから第三次日本侵攻が実現に向けて動き始めた[31]。しかし、この時、既に世祖フビライは高齢であり、二年後の至元三十一年(1294)、フビライが死去すると、第三次日本遠征もそのまま沙汰止みとなった。つまり、第一次・第二次の日本侵攻が収束した後の十年間は、未だ「戦後」とは言えなかったのである。むしろ、条件さえ揃えば、三度目の日本遠征をいつフビライが命じてもおかし

---

25 ただし、この後、元朝の沿海では日本人による暴動に起因する短期的な貿易の途絶が散発する。榎本渉はこれらをそれぞれ「至大倭寇」「泰定倭寇」「元統倭寇」と呼ぶが、榎本自身が指摘しているように、これらの倭寇は暴動的な要素が強い単発的な事件であり、明代以降の倭寇とは性格を異にすることは注意が必要である（榎本渉 2014, 97-98 頁）。

26 『元史』巻一七, 世祖紀一四, 至元二十九年六月己巳

27 正応三年四月二五日付関東御教書（福岡市教育委員会『大悲王院文書 一〇』）；榎本渉 2006, 243-244 頁。榎本は 1280 年代の後半には入元僧が存在しており、両国の交通も再開していたと見ている（榎本渉 2006, 143-144 頁；同 2014, 95 頁）。

28 この時期の元朝の財政・商業政策と南海交易の関係については、四日市康博 2015(b)を参照。また、マラッカ海峡周辺の諸港市王国による海上貿易については、深見純生 2004, 同 2006 を参照。

29 榎本渉 2006；同 2014,

30『元史』巻一三, 世祖紀一〇, 至元二十二年十月癸丑

31『高麗史』巻二九, 世家三〇, 忠烈王三, 忠烈王十八年〔八月〕丁未；巻三〇, 世家三〇, 忠烈王三, 忠烈王十八年〔九月〕壬午

くない状況が続いており、「戦争直前」と言っても差し支えない状況であった。これは元朝と隣接していたベトナムやチャンパーにおいても同様である。しかし、結局、第三次の日本侵攻は実現しなかったのに対して、チャンパー、ベトナムに対しては日本戦役の後に第二次、第三次の侵攻がおこなわれている。さらには、その後、ジャワに対しても遠征軍が派遣されている。この違いはやはり、ベトナム、チャンパー、ジャワが南海交易の幹線ルート上に位置していた要衝であったのに対して、日本は当時の海上交通の大動脈とは外れたところに位置していたことが大きいと考えられる。ベトナム、チャンパーを経由する「西洋航路」に対して、日本や琉球が福建地方やマニラなどと結びついた「東洋航路」が重要性を増すようになるのは十六世紀以後のことである[32]。この時点では、元朝は南海を経由してイスラーム諸国まで達する「西洋航路」沿線の国々に対する経略を優先させていた。それは、当然、軍事・政治上の意味合いだけでなく、経済・商業的な目的が多分に含まれていた。元朝によるベトナム侵攻においても、続くジャワ侵攻においても、商人や貿易を目的とした招撫をおこなう一団が遠征軍に同行している[33]。しかし、日本侵攻においては、そのような貿易振興的な目的を持った人間が同行していた痕跡が確認できない。あくまでも高麗経略・南宋経略の延長線上として日本経略がおこなわれたと考えられる。結果として、そのような背景の違いによって第三次日本侵攻が実現に至らなかったのではないだろうか。世祖フビライの死後に即位した成宗テムルは大徳三年に禅僧の一山一寧を使節として日本に朝貢を促しているが[34]、フビライの時代に比べると日本に対する姿勢はかなり軟化しており、既に武力によって冊封に組み込む意図は無かったとみられる。成宗テムル朝以後も中央ユーラシア方面ではモンゴル宗族間の武力衝突が絶えなかったのとは対照的に、日本を含む海域アジア諸国に対する軍事侵攻はほぼ見られなくなる。よって、成宗テムル朝以後をもって日本-元朝戦役もようやく戦後を迎えたと見て差し支えないだろう。日元間の交易が活況を呈するのはまさにこれ以降の時期である。

では、元朝-日本戦争以前と以後では、どのような違いが見られるのであろうか。村井章介によれば、日宋・日元の交易には貿易船到来頻度の規制、日本人の渡海規制、銅銭流通禁止などの規制が実施されていたが、それらはいずれも建前上のものであったという[35]。しかし、元朝の第一次日本侵攻の直後から鎌倉幕府は具体的・実効的な規制措置を取り始める。弘安四年(1281)、鎌倉幕府は新たに入国する外国人に対して規制するという法令を出し、次いで正安二年(1300)には鎮西探題に外来者の管理・監督の権限を付与し、「異賊防禁」の名のもとに鎮西探題の軍事機能を強化した[36]。これらがきっかけとなって博多には次第に公権力の支配が浸透していったと村井は説明する。しかも、博多を構成する博多浜と息浜はその後の支配者が別々となり、都市博多の一体性を阻害したと同時に公権力の関与を強める結果となったという。このように見ると、元朝-日本戦役という短期

---

[32] 東洋航路・西洋航路に関しては、四日市康博 2015(b)を参照。
[33] 四日市康博 2015(b), 26-29 頁。
[34] 『元史』巻二〇, 成宗紀三, 大徳三年三月癸巳。なお、この国書の写しが金沢文庫に残されている（『金沢文庫古文書』6773）。
[35] 村井章介 2013(a), 264-266 頁。
[36] 鎌倉幕府追加法四八八条（異国警固条々）、七〇一条（牒使来着時在所并問答法事）（『中世法制史料集』第一巻, 249 頁, 307 頁）；村井章介 2013, 265 頁。

的な軍事インパクトが政治的・経済的・文化的な長期インパクトとしてその後も大きな影響を与えていったことがわかるだろう。

これと同様のことは元朝側にも言うことができる。榎本渉は元朝-日本戦役以後の日元交通の展開について、従来あった戦役以後に貿易政策が消極化したという説を否定し、元朝側の倭船警戒根拠を日本の招撫失敗による不臣服であったと結論づける[37]。私もこの論に賛同する。元朝の日本侵攻という戦役自体、日本の臣従による冊封体制への編入を目的としたものであり、その後の元朝側の警戒は戦争そのものに対する反動よりも、朝貢国として日本を管理下に置くことができなかったことに起因するのであろう。しかも、元朝側の警戒にもかかわらず、盛んに交易船が往来しているという事実は、両国間の交易による利益が両国政府の没交渉や相互不信を上回るほどのものであったことに他ならない。特に日本側からのアプローチには強いものがあり、日本と元朝間を往来していた交易船は中国のジャンク船であったにもかかわらず、主に日本側の需要に添う形で運行されている[38]。このような日元交易船は日本側では「寺社造営料唐船」と呼ばれているが[39]、これは或る意味、貿易構造や内容の変化を反映したものであった[40]。例えば、経済面では元朝からも宋銭を多く含む大量の中国銭が日本に輸入され、銀が日本と元朝の双方向に流通していたが[41]、モンゴル帝国期はユーラシア全体を銀が環流した時代として知られている。また、元朝下における書画・陶磁器・茶文化などは日本における唐物受容と不可分であり、それは続く明代ー室町時代にも継承されてゆく[42]。それらの中には必ずしもモンゴル的とは言えない要素も含まれるが、元朝統治下の華北・江南で継承され発展していったものであり、やはり元代には元代の特徴がある[43]。元朝後半期に日本と元朝間での僧侶の往来は空

---

[37] 榎本渉 2007(b), 106-117 頁：森克己 1975, 366-370 頁, 511-525 頁。江静 2000, 同 2002 も参照。

[38] その理由としては、日本から元朝側に航行する交易船はいずれも元朝側の市舶司廃止・下海禁止期間と関係なく元朝側の港（主に慶元）に入港しているが、日本へ帰航する際には市舶司廃止・下海禁止期間中は出港することができず、下海禁止令が解除されて初めて出港していることが挙げられる。詳しくは、四日市康博 2016 で取り上げた。

[39] 「寺社造営料唐船」に関しては、村井章介 2003、村井章介 2013；中村翼 2013 などを参照。また、寺社造営料唐船の個別の事例に関しては、福島金治 1991；福島金治 1996；永井晋 2010 も参照。

[40] 南宋期に博多から多く出土する「綱」銘および「綱首」銘墨書陶磁器は元代になるとほぼ見られなくなる。これは、宋代の綱を中心とした海上貿易構造が元代には変容したことを示唆している。一方で、新安沈没船からは「綱司」銘の木簡が多数出土しているが、この「綱司」が「綱首」と同様の意味として用いられていたのか、或いは別の立場の者であったのか、未だ解決されていない。

[41] 日本から中国への銀の流れは、『至正四明續志』巻五, 市舶物貨, 細色に「倭銀」として、日本の銀、特に対馬銀が慶元（現 寧波）経由で元朝に輸入されていたことが明らかである。一方、博多の聖福寺では江戸時代の享保元年(1716)に元代の銀錠が出土しており、その際の様子が伊藤東涯の『盍簪録』に記されている。これは銀の流通が決して一方行ではなく、中国から日本へも銀の流通があったことを示している。（『盍簪録』巻四）

[42] 具体的な事例としては、例えば、村井章介 2003；榎本渉 2003 などを参照。

[43] 端的な事例としては、日本の唐物文化・禅宗文化のなかに散見する「蒙古文字」、すなわち、パクパ字が挙げられる。日本では蒙古字をパクパ字として認識した上で積極的に持ち込まれたわけではなかったが、それでも随所にパクパ字が残されている。例えば、茶壺に利用された福建・広東産の褐釉四耳壺（後にルソン壺と呼ばれるようになる）や青磁にはしばしば漢字の吉祥句が刻されているが、兵庫・鹿児島・博多（新安船）・沖縄などではパクパ字のスタンプ印を刻した四耳壺やパクパ字銘のある青磁が出土している（たつの市埋蔵文化財センター 2015；石垣市総務部市史編集課 2008；鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会 2006）。また、室町後期の臨済宗の禅僧、玉隠英璵は自らの名をパクパ字で表記した落款印を作成しているが（日本経済新聞社 2003）、これはパクパ字の漢字音との対応表を示した韻書である『蒙古字韻』を参照したと見られ、十五～十六世紀までは玉隠が住持を務めた建長寺、或いは金沢文庫などに日本に将来された『蒙古字韻』が残されていたと考えられる。

前の盛行を迎えたが、村井章介や榎本渉はこの時期を「渡来僧の世紀」と呼んでいる[44]。これらの文化交流は一見すると「モンゴルの衝撃」と結びつかないような印象を受けるかもしれないが、それらはモンゴルの覇権下に隆興した経済・文化交流によってもたらされたものであり、「モンゴルの衝撃」と無関係と言うことはできない[45]。

おわりに：「モンゴルの衝撃（モンゴル・インパクト）」とは何であったのか

日本だけを主体に考えると、「モンゴルの衝撃」とは戦役そのものが最大かつ主体的なインパクトであった思われがちである。実際、従来のモンゴル襲来研究は、主に戦役前の外交関係や戦争そのものだけに焦点が当てられてきた。しかし、先に見たように、海域アジアの他の諸地域の事例も勘案してみると、「モンゴルの衝撃」とは決して戦役のみではなく、むしろ、戦後の政治関係・経済関係こそが社会や文化に大きな影響を及ぼした「長期的インパクト」であったことがわかる。さらには、戦前・戦中に生じた政治的なインパクトがその後の経済的・文化的インパクトに深い影響を与えていたことが確認される。言葉を換えれば、日本戦役に際して元朝・日本（鎌倉幕府・朝廷）双方から貿易や通交に関して規制がかけられ、それが貿易構造そのものに直接影響を与えたわけであるが、その状況とその後の揺り返しによる貿易隆興とは一連の流れとして捉えられなければならない。先の村井の説にあったように、日本-モンゴル戦争直後から日本側は貿易規制を急速に強めて、新たな来航者を制限したが、それにより、それまでの中国側に本拠を持つ漢人商人（いわゆる「宋商」）主体の貿易から博多に拠点を置く漢人商人（「宋商」の子孫たち）に主体が移り、さらには漢人商人の日本定住化が進むと、室町＝明代には「宋商」の子孫を含む日本商人に主体が移っていったと考えられる。いずれにしても、鎌倉・南北朝＝元代は日中貿易の構造が転換する過渡期であり、それには元朝-日本戦役とその後のインパクトが深く関わっていたのである。

本稿は紙幅の関係もあり、敢えて日本における「モンゴルの衝撃」の内容にどのようなものがあったのか具体的な事例は取り上げずに、「モンゴルの衝撃」が軍事的・政治的なインパクトに限られず、それらの短期インパクトがさらに経済的・文化的なインパクトに繋がったという点に主眼を置いた。本当にこのテーゼが正しいのかどうか、それには日本以外の地域も視野に入れつつ、具体的な事例を取り上げながら検証してゆかなければならないが、それは今後の課題として筆を置くことにしたい。

---

[44] 村井章介 2013(b); 榎本渉 2007 などを参照。

[45] 実際、元朝-日本戦争に際しては、鎌倉幕府は日本に来ていた渡来僧や入宋僧のネットワークを最大限に活用して情報収集や諜報活動に努めたが、「渡来僧の世紀」と呼ばれる元朝期の僧侶往来の活況はその延長線上にあると言える。モンゴル襲来時における禅僧の活動とその後の展開については、伊藤幸司 2009, 同 2010 を参照。

史料

『元史』：『元史』校点本. 15 冊. 北京：中华书局， 1976.
『蒙古字韻』：照那斯图, 杨耐思（编）『蒙古字韵校本』北京：民族出版社, 1987.
『四明續志』：中國地志研究會（編）『至正四明續志』宋元地方志叢書. 台北：中國地志研究會, 1978.
『高麗史』：国書刊行会（編）『高麗史』上中下. 国書刊行会, 1977.
『盍簪録』：森銑三ほか（編）『随筆百花苑 ６』東京：中央公論社, 1983 所収.
『鎌倉幕府法 追加法』：佐藤進一、池内義資（編）『中世法律史料集 第一巻 鎌倉幕府法』東京：岩波書店, 1955 所収.
Marco Polo. *Le Devisement dou Monde*（マルコ=ポーロ『世界の記述』）：
-Marco/F/Benedetto: Luigi Foscolo Benedetto (ed.), *il Milione : Prima Edizione Integrale*. Firenze, 1928.
-Marco/R/Einaudi: Giovanni Battista Ramusio (ed.), *I viaggi di Marco Polo*. In *Navigazioni e viaggi*. vol.3, Venezia, 1559 (Giulio Einaudi (re.ed.), Torino, 1980.)

参考文献

榎本涉 2003「陸仁と道元文信をめぐって」『東アジア海域と日中交流——九～一四世紀』東京：吉川弘文館, 2007, 212-269 頁（原載：「一四世紀後半、日本に渡来した人々」『遙かなる中世』20, 2003.）
榎本涉 2006「初期日元貿易と人的交流」『宋代の長江流域——社会経済史の観点から』東京：汲古書店. 231-272 頁.
榎本涉 2007(a)『東アジア海域と日中交流——九～一四世紀』東京：吉川弘文館.
榎本涉 2007(b)「元朝の倭船対策と日元貿易」『東アジア海域と日中交流——九～一四世紀』東京：吉川弘文館, 106-175 頁.
榎本涉 2014「宋元交替と日本」『岩波講座 日本歴史 第七巻 中世２』東京：岩波書店. 77-112 頁.
榎本涉 2015「13 世紀の東アジア情勢と高麗・大越・日本」『日越交流における歴史、社会、文化の諸課題』京都：国際日本文化研究センター. 17-24 頁.
深見純生 2004「元代のマラッカ海峡——通路か拠点か」『東南アジア——歴史と文化』18. 86-98 頁.
深見純生 2006「ターンブラリンガの発展と 13 世紀東南アジアのコマーシャルブーム」『国際文化論集』34. 81-97 頁.
福島金治 1991「鎌倉極楽寺の唐船派遣について」『地方史研究』233.
福島金治 1996「中世鎌倉律院と海上交易権——熱海船の性格と鎌倉大仏造営料唐船の派遣事情」『鎌倉大仏研究』1
石井正敏 2010「文永八年の三別抄牒状について」『中央大学文学部紀要 史学』56, 1-34 頁.
石垣市総務部市史編集課 2008.『石垣市史考古ビジュアル版５ 陶磁器から見た交流史』石垣市.
伊藤幸司 2009「外交と禅僧——東アジア通交圏における禅僧の役割」『中国——社会と文化』24. 41-70 頁.
伊藤幸司 2010「東アジアをまたぐ禅宗世界」荒野泰典・石井正敏・村井章介（編）『日本の対外関係４ 倭寇と「日本国王」』東京：吉川弘文館. 30-56 頁.
江静 2000「元代赴日中国商船鋭減原因初探」『中日文化論叢』1998.
江静 2002〈元代中日通商考略〉《中日关系史料与研究》1.
鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会 2006.『国指定遺跡 知覧城（三）』知覧町：鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会.
川添昭二 1993「鎌倉末期の対外関係と博多——新安沈没船木簡・東福寺・承天寺」『鎌倉時代文化伝播の研究』東京：吉川弘文館.

李康漢 2016「高麗におけるモンゴルのインパクトとレスポンス」『国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト」予稿集』東京：昭和女子大学.
桃木至朗 2011『中世大越国家の成立と変容』吹田：大阪大学出版会.
森克己 1975『日宋貿易の研究』東京：国書刊行会.
森平雅彦 2013『モンゴル覇権下の高麗——帝国秩序と王国の対応』名古屋：名古屋大学出版会.
문화 공보부 문화재 관리국(文化公報部文化財管理局)（編）1981-85『新安海底遺物（資料篇 I-III)』서울：한국 문화 공보부 문화재 관리국.
문화 공보부 문화재 관리국（編）1988『新安海底遺物（綜合篇)』서울：한국 문화 공보부 문화재 관리국.
문화재청, 국립해양유물전시관(文化財庁, 国立海洋遺物展示館)（編） 2006『新安船 The Shinan wreck』1-3. 목포: 문화재청 , 국립해양유물전시관.
村井章介 1988(a)「高麗・三別抄の叛乱と蒙古襲来前夜の日本」『アジアのなかの中世日本』東京：校倉書房, 1988, 144-188 頁.
村井章介 1988(b)「蒙古襲来と鎮西探題の成立」『アジアのなかの中世日本』東京：校倉書房, 1988, 189-235 頁（原載『史学雑誌』87/4, 1978 より改編）
村井章介 2003「日元交通と禅律文化」『日本中世の異文化接触』東京：東京大学出版会, 2013, 171-213 頁（原載：『日本の時代史 10 南北朝の動乱』東京：吉川弘文館, 2003.）
村井章介 2010「蒙古襲来と異文化接触」『日本中世の異文化接触』東京：東京大学出版会, 2013, 375-400（原載：荒野泰典・石井正敏・村井章介（編）『日本の対外関係４ 倭寇と「日本国王」』東京：吉川弘文館, 2010.）
村井章介 2013(a)「寺社造営料唐船を見直す——貿易・文化交流・沈船」『日本中世の異文化接触』東京：東京大学出版会, 2013, 241-272 頁.
村井章介 2013(b).「肖像画・賛から見た禅の日中交流」『日本中世の異文化接触』東京：東京大学出版会, 2013, 273-294 頁.
永井晋 2010「金沢文庫古文書に見る唐船派遣資料」『金沢文庫研究』324.
中村翼 2010「鎌倉幕府の「唐船」関係法令の検討——「博多における権門貿易」説の批判的継承のために」『鎌倉遺文研究』25.
中村翼 2013「日元貿易期の海商と鎌倉・室町幕府——寺社造営料唐船の歴史的位置」『ヒストリア』241.
日本経済新聞社, 東京国立博物館（編）2003.『鎌倉——禅の源流』東京：日本経済新聞社.
Prawdin, Michael 1937. *The Mongol Empire: Its Rise and Legacy*. (tr.) Eden and Cedar Paul. Brunswick and London: Aldinetransaction.
たつの市埋蔵文化財センター 2015.『謎のパスパ文字と光明山』たつの市埋蔵文化財センター.
佐口透 1970「タタールの平和」『岩波講座世界歴史 中世３』東京：岩波書店.
四日市康博 2001「パクス・モンゴリカ——東西交通の繁栄」『しにか』140, 50-55 頁
四日市康博 2015(a)「ユーラシア的視点から見たイル=ハン朝公文書——イル=ハン朝公文書研究の序論として」『史苑』75/2, 257-300 頁.
四日市康博 2015(b)「13～14 世紀における中国－東南アジアの通交と貿易——元朝から見た西洋航路上の南海諸国との関係を中心に」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』21, 13-41 頁.
Yokkaichi Yasuhiro 2015. (ed.) Special Issue: *Multilingual Documents and Multiethnic Society in Mongol-Ruled Iran*, in *Orient* 50.
四日市康博 2016「14 世紀の日本と元朝の海上交易における新安船」『 신안선 발굴 40 주년 기념 국제학술대회——아시아·태평양 해양네트워크와 수중문화유산』목포시 : 국립해양문화재연구소, 164-184 頁.